

光源氏の出家願望から薫の道心と浮舟の出家へ

高 木 和 子

源氏物語は光源氏の恋愛遍歴の物語として知られるが、それは比較的読み取りやすい表面上の格好に過ぎず、内奥には家の物語、政治の物語などが潜在しており、それぞれの脈絡で読み解くことができる。多様な解釈を包摂するのは古典的名作の条件でもあり、とりわけ源氏物語には、多様な解釈を求める読者に柔軟に応じる豊穡さがある。

さてその源氏物語において、作中人物に共通して萌す内的情動に〈出家願望〉がある。作中の人々は〈出家〉をどこかで意識しながら生きている。浄土教の流布した平安中期の貴族は自殺が忌まれる環境にあったため、出家は唯一と言ってもよい現実逃避の方法であり、往生を果たす救済への方途だった。そうした時代状況を受けて、〈出家願望〉はこの物語の大きな一つの軸となっている。

源氏物語における出家については、岡崎義恵をはじめ、阿部秋生などに先駆的な仕事があり、三角洋一、中哲裕、柳井滋らによって源氏物語の仏教観を巡る諸論がなされてきた。⁽¹⁾ 稿者もすでに光源氏の出家願望や「宿世」「絆」「無常」の意識等を論じたが、本稿ではこれらの骨子を確認しつつ、光源氏の出家願望を巡る課題が、いかに薫と浮舟の物語に引き受けられているかについて考えたい。

一 第一部における光源氏の出家願望

まずは光源氏に萌す出家への希求と非実現の脈絡を、確認しておきたい。

源氏物語第一部については、とりわけ王権論通過後は、臣籍降下した光源氏が藤壺と密通し、罪の子が即位するこ

とで、その父として栄華を極める物語として理解されるのが通説である。ところがその光源氏は、比較的初期から出家願望を抱く。前稿の骨子を辿れば、恋の不如意や栄達の自覚から出家を願うものの、紫上や子供たちへの執着から実現できないという往復運動を重ねる。やや不自然なまでに年若いうちから光源氏が出家を願うのは、一面では藤壺への思慕や密通についてのしばしば指摘される罪意識の希薄さ⁽³⁾を補う意味もあろう。恋にうつつを抜かずだけでは軽薄に見えかねない主人公に与えられた、内省の形として機能しているのである。しかし光源氏が出家してしまえば、物語は主人公を失ってしまう。そのために出家への希求とその断念という往復運動が繰り返される。その結果、在俗のまま迷いを抱える人物像が、形作られていくことになる。

以下具体的に確認したい。若紫卷、北山で僧都から「世の常なき御物語、後の世のこと」(小学館新編日本古典文学全集①二二頁)を聞いた光源氏は、「わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき」と、おそらくは藤壺への思慕に悩んで後生に不安を抱いて仏道に心を傾けるものの、翻って「昼の面影心にかかりて恋しければ」(①二二二)と、見つけたばかりの若紫に心を移し、

出家への希求は即座に消えてしまう。葵卷、葵上の没後も同様に、左大臣邸で喪に服して仏事に明け暮れ、六条御息所の生霊事件によって男女関係はすべて厭わしくなるものの、「かかる絆^{はだし}だに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなまし」(②五〇)と誕生したばかりの夕霧が「絆」と意識されるほか、「まづ対の姫君のさうごうしくてものしたまふらむありさまぞ、ふと思しやらるる」と紫上を想って出家できない。賢木巻で藤壺に求愛を拒まれて雲林院に籠った際にも、律師の念仏を聞いて出家を羨むものの、即座に翻って「まづ姫君の心にかかりて、思ひ出でられたまふぞ、いとわろき心なるや」(②一一七)と、紫上が気になって出家できず、未練たらしいと語り手に揶揄される。

このように若年期の光源氏は、藤壺を始めとする女性関係の憂愁から出家を願うものの、紫上や夕霧への愛着から世俗に留まる。ただし須磨に下向した際には、「白き綾のなよかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりてゆるるかに誦みたまへる、また世に知らず聞こゆ」(②二〇一)と讃美され、比較的落ち着いて念仏を唱えている。表向きは朧月夜との関係による謫居だが、内実は藤壺との関係の贖罪であり、東宮の無事な即位を期

待した真剣さゆえだとも、須磨には女性が不在だからともいえよう。ここでは、暴風雨および明石一族との出会いという新展開によって、俗世に引き戻されることになる。

絵合巻末尾、政権復帰後の光源氏は「なほ常なきものに世を思して」(②三九二)と世の無常を感じ、冷泉帝がもう少し成長したら「なほ世を背きなん」と深く出家を願う。若いまま出世すれば長生きできないという盈虚思想を念頭に、須磨流謫の不遇を代償に今も生きながらえているとし、これ以上繁栄すれば自分は短命になると考えている。「静かに籠りゐて、後の世のことをとめ、かつは齢をも延べん」と嵯峨野に御堂を作る。これは一面では大堰の明石の君を訪ねる方便として物語が用意した装置であるにせよ、出家後の住まいの準備に相当する。しかしこれまで同様、「末の君たち、思ふさまにかしづき出だして見むと思しめすにぞ、とく棄てたまはむことは難げなる」(②三九二—三三)と、夕霧や明石姫君の将来を懸念して出家できない。さらに藤裏葉巻で光源氏は、准太上天皇となった栄華を自覚し、夕霧の雲居雁との結婚を受けて、「今は本意も遂げなん」(②四四三)と出家を願う。紫上には秋好中宮や明石姫君、花散里には夕霧がいるから皆安泰と思うものの、結局出家できない。

この出家を願いつつ実現できない光源氏の心の形は、もう一方の軸である光源氏の好色を象る文脈といかに関わるのだろうか。そもそも光源氏は帚木巻頭で「さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける」(①五三—四)と、「本性」と「癖」によってその性癖が語られていた。ありきたりな好色は好まず、困難な恋に夢中になる「あながち」で「あやにく」な「癖」があるとされたのである。「癖」による情動は、とりわけ賢木巻では禁忌の女性たちに対して暴走する。⁽⁴⁾「例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖」(②九二)は斎宮に、「例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり」(②一〇二)は臘月夜に、「野宮のあはれなりしことと思し出でて、あやしう、やうのものと、神恨めしう思さるる御癖の見苦しきぞかし」(②二二〇)は朝顔斎院に、「後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば」(②二四三—四)は臘月夜に対する執着である。だが後に光源氏は、これらを反芻し内省する。藤壺没後の薄雲巻、斎宮女御に懸想をしては、「かうあながちなることに胸ふたがる癖のな

「ほありけるよ」(②四六四)と自覚し、かつての藤壺や六条御息所との関係は「恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど、いにしへのすきは、思ひやり少なきほどの過ちに仏神もゆるしたまひけん」と過去の恋は若さゆえの無謀だったが、今の懸想、実子である冷泉帝の妻の斎宮女御への恋慕は許され難からうと自制する。斎宮女御への懸想を拒まれた自己弁護とも読めるが、若き日の無軌道さを内省したくだりとしては象徴的である。

総じて濔標巻以後の光源氏は、超越性を次第に喪失し、他の作中人物と相対的な存在になるとされる。光源氏と内大臣(もとの頭中将)の対立、夕霧による六条院の女達の垣間見、鬚黒による玉鬘との略奪的結婚などもろもろ、光源氏は他の人物との間で常に圧倒的に優位にあるとは言い難いからである。しかしそうした経緯を含めても、結果として光源氏はやはり唯一の主人公としての尊厳を保ち続ける。鬚黒に玉鬘を奪い取られた光源氏は、「すいたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや」(③三九二)と好色ゆえに心乱れる自身の懊悩を見つめては、琴を掻き鳴らし歌いすさぶ。その姿は「恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり」(③三九三)と語られ、喪失の悲

しみに暮れる姿にこそ王者性が見出される。玉鬘を失って悲しみに暮れる光源氏と、出家を忸怩して実現できない光源氏とは、一個の人物像として不自然でない一貫性が認められる。これらの内省や失意の姿は、一見乱脈で好色に見える光源氏の人物像に奥行きを与えているのである。

二 第二部における人々の出家と非出家

若菜上巻は、朱雀院が出家を願ひ、女三宮を光源氏に託すところから始まる。多くの人々が出家するか否かを煩悶、朱雀院や朧月夜は出家、明石入道は入山、柏木は出家を考へるもそれを飛び越えて死へと向かい、女三宮は光源氏を振り捨てるように朱雀院の手で出家する。一方紫上や秋好中宮は出家を願うが、光源氏に制止される。これらを通して、出家を願ひながら実現できない光源氏の迷妄が炙り出される体なのである。

以下具体的に確認していく。若菜上巻冒頭、朱雀院は病重くなり、「年ごろ行ひの本意深きを、後の宮のおはしましつるほどは、よろづ憚りきこえさせたまひて」(④一七)と長年出家の志を母の弘徽殿女御に憚って実現できずにいたが、今こそはと、女三宮の裳着を終えて出家を果たした。とはいえその後も、嘆く朧月夜に「姫宮の御事をおきては、

この御事をなむ、かへりみがちに」(④七六)と心を残す。朧月夜は「尼になりなむ」と出家を願うが、競うような出家は軽率と朱雀院が制止した。また明石の入道も、妻の尼君と娘の明石の君に便りを送り、明石姫君の東宮の子の出産の報を受けて安堵したと、「今は、さりととも、仏神を頼み申してなむ移ろひける」(④一一二)と深い山に籠った。

若菜下巻になると、紫上は光源氏の寵愛が衰える前に、「あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな」(④一七七)と出家を願うものの、「さかしきやうにや思さむとつつまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず」、小賢しいかと遠慮されてはつきり口に出せずにいる。女寮の後には、身に余る世評や榮華は実感するが嘆きも深いと光源氏に語り、「いと行く先少なき心地するを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ」(④二〇七—八)、若い先短い気がするし今年は何年だから不安です、「さきさきも聞こゆること、いかで御ゆるしあらば」と出家の許しを乞う。だが光源氏は「さてかけ離れたまひなむ世に残りては、何のかひかあらむ。ただかく何となくて過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ」と、明け暮れ紫上と隔てなく暮らすことだけ

が生き甲斐だからと出家を許さない。その夜から床に臥した紫上の看病にかまける光源氏は、やがて女三宮を柏木に寝取られてしまい、心浅いと侮っていた朧月夜には先に出家されてしまう。

柏木巻冒頭、光源氏に密通を知られて病の床にいた柏木は、幼少から公私にわたって自負していたが、一つ二つの挫折を経験してからは、「なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに本意深くすすみにしを」(④二八九)と俗世を倦んで出家を願うも、「親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重き絆なるべくおぼえしかば」と、両親を「絆」と感じて出家できずにいたという。しかし結局、不義の子の将来を思えば光源氏の許しを得るためには、と出家を飛び越えて死を希求する。一方の女三宮は不義の子薫出産後、光源氏のつれなさに、「さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ」(④三〇一)と、父朱雀院の手で出家を果たし、柏木も没してしまふ。横笛巻で朱雀院は、娘の落葉宮は夫の柏木に先立たれ、女三宮も出家したことを嘆き、「御行ひのほどにも、同じ道をこそは勤めたまふらめ」(④三四六)と同じく仏道に入った女三宮を気にかけて始終交流する。この一連の朱雀院の娘たちの結婚の失敗は、あ

たかも継子譚の継母方の娘達への報復劇のようでもある。

一方、秋好中宮や落葉宮は出家できない。鈴虫巻で秋好中宮は、母六条御息所が成仏できず死霊となつて跋扈している耳にして、「いと悲しういみじくて、なべての世の厭はしく思ひなりて」(④三八八)、母の罪業を償うべく出家を願うが、光源氏に制止される。光源氏は「世の中なべてはかなく厭ひ棄てまほしきこと」(④三九〇)と世の憂さを自覚しつつ、容易に出家できない。また夕霧巻で落葉宮は、母一条御息所の没後に隠棲を願うが、朱雀院は「後見なき人なむ、なかなかさるさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる」(④四六〇)と、朱雀院や女三宮が出家した上に、女二宮まで争うように出家するのは見苦しいと制止する。

こうした種々の人々の出家を巡る状況を受けて、御法巻冒頭、光源氏と紫上の、出家を願いながら出家できない二人の姿が語られる。紫上自身は「この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば」(④四九三)と、何も「絆」となる執着の種はなく長生きも望まないながらも、ただ「年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける」、と長年寄り添っていた自分を失った後の光源氏

の惑乱を「あはれ」と感ずる。それでも紫上は「いかでなほ本意あるさまになりて」と出家を願ひ続けるが、光源氏は許さない。実は光源氏も、「かくねむごろに思ひたまへるついでにもよほされて同じ道にも入りなん」(④四九四)と自分も俗世を捨てたいのだが、一度出家した以上は、たとえ後世では同じ蓮の上にと願う紫上でも現世では別々に暮らさねばならないから気がかりだとし、「ただうちあさへたる思ひのままの道心起こす人々には、こよなう後れたまひぬべかめり」、深い道心もなく出家する人々に後れを取ったと嘆く。紫上も「御ゆるしなくて、心ひとつに思ひ立たむも、さまあしく本意なきやうなれば」(④四九四―五)と光源氏の許しのない出家は躊躇され、結局出家できない。ここでの「うちあさへたる思ひ」という表現には注目しておきたい。

このように互いに互いを想いあつて出家できずにいる光源氏と紫上を、脆弱だと否定的に評することは難しく、むしろ、この上ない夫婦愛の形だと理解するのが自然な読み方ではなからうか。だとすれば、この物語は仏教に一つの価値軸を据えながらも、出家を単純に礼讃せず、仏教上の「罪」にあたる「絆」を捨てきれず、他者に情愛を抱き続ける姿勢を容認するという、きわめて人間的な物語なのだ

と、少なくともいったんは言えるだろう。

さてそれならば、光源氏は紫上を亡くした後は容易に出家できるはずだが、ついに出家できないまま物語から退場する運びとなる。これはなぜだろうか。

御法巻、光源氏は紫上を失い、いよいよかねてからの出家の本意を遂げたいと思うものの、「心弱き後の譏りを思せば、このほどを過ぐさんとしたまふ」(④五一)と、妻を追うように出家した軟弱さに対する世の批判を恐れて、すぐには実行できない。「いにしへより御身のありさま思しつづくるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに來し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな」(④五一三)と、格別の容貌に恵まれて数奇な人生を生きたが、悲しみの深さも類い稀だった、仏が無常の世を悟らせるために作った身かと述懐する。光源氏は、「ひたみにちに行ひにおもむきなんに障りどころあるまじきを、いとかくをさめん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくや」と、今はもはや何の障りもないのに出家できない、と煩悶する。

幻巻でも同様の述懐が繰り返される。「この世につけて

は、飽かず思ふべきことをさあるまじう、高き身には生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかなと思ふこと絶えず。世のはかなくうきを知らすべく、仏などのおきてたまへる身なるべし」(④五二五)と、自分は何一つ不満足な点もないほど榮華を極めたが、格別に口惜しい宿運で、世の憂さを悟らせるべく仏が作った身だという。そして紫上と死別し、「今なんつゆの絆なくなりたる」(④五二五・六)と執着の種はもうないが、「ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れんほどこそ、いま一際の心乱れぬべけれ」、身近な人々との別れに心が乱れる自分を「わろかりける心のほどかな」、未練がましいと自嘲する。

さらに明石の君を相手取つても同様のことを語る。「人をあはれと心とどめむは、いとわろかべきこと」、「この世に執とまるべきことなくと心づかひをせし」(④五三三)と、人に「あはれ」をとどめ、この世に執着をとどめるのはよくないことと自戒してきたし、自ら死ぬべく野山に入つても構わない我が身と思うが、「末の世に、今は限りのほど近き身にてしも、あるまじき絆多うかかづらひて今まで過ぐしてけるが、心弱う、もどかしきこと」と、なおも「絆」にほだされ俗世を捨てられないと慨嘆する。これに対して

明石の君は、普通の人でも内心に「絆」は多いのが常で、目先の不満を紛らわす出家はよくない、「さやうにあさへたることは、かへりて軽々しきもどかしさなどもたち出でて、なかなかなることなどはべなる」(④五三四)、浅はかな出家は不具合も生じてよくない、「思したつほど鈍きやうにはべらんや、つひに澄みはてさせたまふ方深うはべらむ」なかなか出家が決心できないのは、鈍重なようで実は心を浄化した理想的な出家を果たすことに繋がるのだと、光源氏の躊躇いを慰める。先に軽々しい出家を「うちあさへたる思ひ」とした光源氏の内心を熟知するかのように、「あさへたること」と評するのは、忸怩する光源氏には得心できる答えて、光源氏をよく理解した明石の君にしか担えない役どころである。

光源氏の最後は、「御容貌、昔の御光にもまた多く添ひて、ありがたくめでたく見えたまふを、この古りぬる齡の僧は、あいなう涙もとどめざりけり」(④五五〇)とあくまで美々しい。物語は出家できない光源氏を否定していない。安易な出家への際限のない躊躇いを通して、光源氏は厳格な仏教者となって往生したのだろうと予感させる退場である。

三 第三部における薫の道心

しかしこのような光源氏中心主義の解釈は、あるいは現代の読者の共感を得難いかもしれない。研究史上でも、光源氏の晩年の物語を六条院の凋落と〈相對化〉を評するものが、この数十年の趨勢であった。そうした読後感は、制作当時にもあり得ただろうことは、無名草子の光源氏に対する辛口な批評からも察せられる。ならば、いったん光源氏を主人公とする物語を語り終えた先に要請されたのが、光源氏没後のいわゆる第三部の物語だと考えてみよう。源氏物語は、書き残した課題を別の人物の上で試すことを通して長編化を果たすからである。たとえば、より高貴な妻が出現する夫婦の危機の課題は、朝顔巻では回避されたものの、若菜上巻の紫上に本格的にもたらされる。不義の子冷泉帝は光源氏を父として処遇することに腐心し、自らの出生の抱える潜在的な罪と対峙しないが、その欠落を埋めて後の薫の物語が要請される、といった具合なのである。

一般に光源氏没後の物語では、主人公らしき造型は、匂宮と薫に分化されると理解されている。匂宮が光源氏の好色とその風流、「すき」の部分を継承する一方、薫は「まめ」の人物として、光源氏よりはむしろ夕霧が先蹤であるとき

れてきた。正編から続編への作中人物の造型の継承は、他にも夕顔や朧月夜から浮舟へという二人の男と関わる女の系譜、朝顔から大君への結婚拒否の系譜、紫上から中の君への「幸ひ人」の系譜といった具合に枚挙に暇なく指摘されている。これらはいずれも単なる類型の反復を超えて、書き残した課題を別の人物の上に再度形象することで、書き加える方法なのだとも言える。

さてその宇治十帖においては、出家や道心の課題は、正編以上に重要に迫り出してくる。宇治八宮は過去の失意のために仏道を志し、薫は出生の秘密から道心を抱き、「法の友」として八宮を慕って宇治に足を運ぶ。大君は出家を願うが実現せずに死去、薫は大君没後に道心を深めるも中の君から浮舟へと心に移す。浮舟は、薫と匂宮の板挟みになって入水に失敗して横川僧都に助けられて出家、薫の便りには応じないという顛末である。八宮の下山を制止する宇治の阿闍梨や、浮舟を救う横川僧都など、物語の主要人物に近く深く関わる僧侶も登場する。これらについては往生要集や源信との関連、准拠、女人往生など多様な視点から論じられてきた。⁽⁸⁾

だが、薫の道心を出生の秘事に由来すると考えるためか、光源氏の出家願望と関連付けて説明されることは、従来必

ずしも一般的ではないように見える。⁽⁹⁾ そのなかで鈴木日出男は、薫の造型の原型に、光源氏の出家願望と現世への執着を指摘しており注目できる。これはなぜ薫がまがりなりにも、光源氏の「ゆかり」の系譜に相当する「形代」の系譜を引き継いで物語展開の推進を担い、「まめ」なる男君としての先蹤である夕霧には果たせなかった、物語主人公の役どころを演じられるかの説明としても有効だろう。また原岡文子は、女三宮から浮舟へという出家する女の系譜を指摘しつつ、手習巻で浮舟に求婚してくる妹尼の娘婿の中将の俗物的道心をもって、「あはれ」の世界の相対化を指摘した。⁽¹⁰⁾ これらを踏まえつつ、もう一步踏み込んで考えてみたい。

光源氏の出家願望と世俗への執着の往復運動を、薫の道心と俗世への執心の往復運動という形で継承させるのが宇治十帖であると考えた時、やや図式的理解となることを厭わずに言えば、正編から続編への構造的な反転が見えてくるのではないか。すなわち、光源氏の出家願望と世俗への未練という往還の何とも言えない歯切れの悪さに対して、それを優柔不断の極みと批判する読み方、光源氏側から「あさへたること」と軽視された女たちの出家にこそ価値を見出したいという読み方を、別の人物の上に具現したのが、

薫の道心と浮舟の出家の物語だと言えるのではなからうか。

以下具体的な叙述に即して辿ってみよう。匂宮巻で薫は、「幼心地にはの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかなく」(⑤二三)、「事にふれて、わが身につつがある心地する」(⑤二四)と、自らの出生や母女三宮の出家の経緯を疑いつつ真実を知るすべのないまま、明け暮れ説經をする。元服を厭うものの辞退しきれず、「おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまで華やかなる御身の飾りも心につかずのみ、思ひしづまりたまへり」(⑤二五)と、俗世での栄達への途に馴染まず厭世感を深めている。

橋姫巻では、八宮の厭世と道心が語られる。妻亡きあとに遺された二人の娘を育てながら、「かかる絆どもにかかづらふだに思ひの外に口惜しう、わが心ながらもかなはざりける契りと思ゆる」(⑤二二)と心を研ぎ澄まして世間並みの暮らしは望まず、時とともに「世の中を思ひ離れつつ、心ばかりは聖になりはてたまひて、故君の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心はへなど戯れにても思ひ出でたまはざりけり」と、俗世からかけ離れて内心では仏道者を自認し、妻を亡くした後は通常の男女関係は断っているという。その八宮と阿闍梨と薫の関係は、冷泉院に親し

く出入りして経を説く阿闍梨が、賢明で悟り深い八宮について語るところから始まる。「心深く思ひすましたまへるほど、まことの聖の掟になん見えたまふ」(⑤二二八)と仏道に専念し、聡明崇高な聖に見えるという。冷泉院が在俗の八宮の「俗聖」との世評を語ると、薫は、俗世を倦み仏道に惹かれながらも自分はまだ不十分と内省「俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに」と関心を抱く。

やがて八宮と薫は「法の友」として交流し始める。八宮は「世の中をかりそめのことと思ひとり、厭はしき心のつきそむることも、わが身に愁へある時、なべての世も恨めしう思ひ知るはじめありてなん道心も起こるわざなめる」(⑤二二二)と、自分は世の無常を知り、厭わしさを思い知る失意の経験があったからこそ仏道に心傾けたが、まだ年若い薫が「何ごとも飽かぬことはあらじとおぼゆる身のほどに、さ、はた、後の世をさへたどり知りたまふらんがありがたさ」(⑤二二二)と何不自由ない身で道心を抱くのは奇特なことと評価する。薫もまた「聖だつ人才ある法師」(⑤二三四)は多いが、生真面目過ぎて気楽に付き合えない中で、八宮は気品があり崇高で慕わしいと心酔している。

この薫と八宮の造型の前提にある「俗聖」という発想、

俗世にありながら出家に深く心を傾けるといふ造型の前提には、出家と俗世との間で往復運動を繰り返した光源氏の造型があると考えられる。将来を期待されない皇子がしばしば寺院で育つ時代、八宮らにとつてそもそも出家者の暮らしはさほど縁遠いものではない。しかし八宮は、一時東宮として擁立されかけたために、かえつて光源氏の政權復帰後に一転して不遇になったという、いわば光源氏の栄華と表裏にある闇を生きる人物である。薫もまた、世間的には光源氏の子でありながら、自らの意思とは無関係に不義の子として生を受けた。八宮と薫とともに、光源氏の栄華の背後にある暗部を背負わされた人物なのである。なればこそこの二人には、光源氏の出家願望の往復運動に似つとも、より力点を道心の側に置いて、日常的に出家を願いながら、出家できず世俗に執念を残すという造型が、与えられるのではなかったか。

椎本巻、八宮は山に籠つて今日は帰るかという夕暮れ、体調不良のために帰邸できなくなる。阿闍梨は、娘たちを気がかりに思う八宮に、「人はみな御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはしませず」「いまさらにな出でたまひそ」(⑤一八八)と今更の下山を制止したため、八宮は結局帰邸できないまま薨去する。一見非情に見える

阿闍梨だが、その後も長く宇治の姉妹に親身に接する慈愛に満ちた人物でもある⁽¹²⁾。

八宮の没後、自身と妹の結婚問題に悩んだ挙句、大君は病床についた。大君は自身の病平癒を願うでもなく、「なほかかるついでにいかで亡せなむ、この君のかくそひゐて、残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし」(⑤三三三)と、薫にすべてを見られた上は離れることも難しいが、近しく関わって失望されるのはつらい、死んでしまいたいと願う。「もし命強ひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ、さてのみこそ、長き心をもかたみに見はつべきわざなれ」と、病にかこつけて出家すれば、互いに長く良好な関係でいられるとまで考える。しかし、「いかでこの思ふこととしてむと思すを、さまでさかしきことはえうち出でたまはで」と、出家をひたぶるに願うのは利口ぶったようだからと、延命のために出家したいのだと訴えて、周囲の女房達に制止される。なるほど、藤壺や空蟬は出家することでは光源氏とむしろ良好な関係を築けたし、紫上はひたすらには出家を懇願せず謙虚な姿勢を貫いている。出家に向ける大君の身構えは、当時の貴族の女性の一般的な姿であると同時に、この物語の女君の類型的造型とも見える。

間もなく大君を失う薫は、道心を深めたのだろうか。薫

は宇治に籠つて暮らしながら、汀の水や月の光に風情を見出しては、大君が生きていれば雪景色を共に見ただろうにと嘆く。「恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし」(⑤三三三)と詠じ、「半なる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ」と仏道の故事にかこつけて身を投げたいという薫を「心きたなき聖心」と語り手が揶揄する。それはかつて賢木巻で、光源氏の出家願望とその断念を、「まづ姫君の心にかかりて、思ひ出でられたまふぞ、いとわろき心なるや」(②一一七)と評した語り手の姿勢と通底するのだが、それだけだろうか。

宿木巻、都に戻った薫には「け近く使ひ馴らしたまふ人々」(⑤三八九)の中には懇意の女もあり、実は宇治の姉妹に近い身分の女も多いのだが、本気で相手取るわけでもない。内心では「今とは世を遁れ背き離れんとき、この人こそと、とりたてて心とまる絆はだしになるばかりなることはなくて過ぐしてんと思ふ心深かりし」と出家の妨げになる「絆」を作りたいくないと、深入りを避けている。その心理は薫自身、「いでさもわろく、わが心ながらねぢけてもあるかな」と自嘲する。これは、新たな「絆」としての「後見」を委託され、最後は周囲の女房達までも「絆」と感じて、その都度出家から遠ざかる光源氏とは大きく異なる点であ

る。薫は「朝顔のはかなげにてまじりたる」(⑤三九〇)に目を留め、「明くる間咲きて」とか、常なき世にもなずらふるが、心苦しきなめりかし」などと朝顔に無常を覚えるのも気分にとどまり、出家への決意を深められず、むしろ今上帝の娘の女二宮と結婚するなど世俗的な榮達に着々と歩を進める。それは榮華への階梯とともに次第に出家願望を深めるも、新たな「絆」の委譲を受けて出家できなくなる光源氏の生の形とは、似て非なる姿ではなからうか。

橋姫・椎本・総角・早蕨巻が宇治を舞台として八宮と娘たちを軸に物語が進められたのに対して、宿木巻では舞台は京に移る。それと同時に、これまで道心を標榜していた薫が、自身の気持ちとしては「絆」を抱えることを忌避しつつも、その実見事に世俗の環境に巻き取られている実情が明らかになってくる。同時に「俗聖」として女性関係には無縁だったかに見えた八宮もまた、実はかつて中将の君と関係し、落胤の浮舟もいて、認知しなかっただけだという水面下の過去が、急に表層に浮上してくるのである。こうした宇治の世界を反転させた京での実情は、薫や八宮の「聖心」の正体を暴くかのようでもある。

東屋巻、中の君は薫の求愛を持て余し、「かの人形ひしがた」、浮舟を勧める。薫は関心を持ちつつもすぐには積極的にはな

らず、「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」(⑥五二—三)、と道心が濁ると応じると、中の君は「うたての御聖心みことこころや」と笑ひ、薫の「聖心」は冗談にされる軽さを帯びてくる。

宇治十帖は、失意の宇治八宮一族を中心に語りながら、次第に京の薫や匂宮の何不自由なく優美な日常を語ることで、双方を相対化していく。それは光源氏の物語がかつて成立論上、藤壺や紫上や六条御息所などの長編的な物語(紫上系)と、空蟬や夕顔や末摘花などの短編的な傍系の物語(玉鬘系)とに二分されたことと対応するかのようでもある。いまこの発想を成立論として議論するつもりはない。

ただ、光源氏の物語の裏舞台(玉鬘系)の物語——中の品の「隠ろへごと」の恋の物語は、宇治十帖では橋姫巻以下の宇治の地での恋の物語としてむしろ中心に迫り出し、逆に、光源氏の物語では主軸であった表舞台の(紫上系)の物語——高貴で典雅な人々との物語は、むしろ後景に退く。それはそもそも宇治十帖が、八宮や薫といった光源氏の世界の闇に相当する人々を主軸に語り始めることに連動した、構造上の反転といえよう。そして押し沈められていた高貴な人々との京での物語が宿木巻や蜻蛉巻で前面に躍り

出た時、大君にひたむきだった薫ばかりか、北の方以外は女性関係に縁遠かったはずの八宮まで、語られなかった女性関係が表層に浮上し、別の相貌を見せ始める。

かつて野分巻の夕霧の垣間見は、紫上との(可能態)の密通と評された。柏木の女三宮との密通に置換され、光源氏の理想性の決定的な破壊は回避されたのである。それと同様の構図がここに認められよう。光源氏の出家は志高い理想の実現だと正編では最後まで礼讃した上で、そこに孕まれた優柔不断な俗物性は、柏木と女三宮の不義の子である薫にこそ担わされたのである。

四 浮舟の出家という終焉

このような薫ひいては八宮の「俗聖」「聖心」幻想の剥落と差し替えに、出家への意思を担い始めるのは、言うまでもなく浮舟である。浮舟巻で匂宮と薫の間で板挟みになった浮舟は、入水を決意して母の中將の君に、二首の和歌を遺して姿を消した。蜻蛉巻、浮舟の失踪判明後、薫は女二宮の元にも渡らず浮舟を追憶し、なぜ生前に大事にしなかったかと悔恨し、自らの人生を総括する。「かかることの筋につけて、いみじうもの思ふべき宿世なりけり、さま異に心ざしたりし身の、思ひの外に、かく、例の人にて

ながらふるを、仏なども憎しと見たまふにや、人の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ：」(⑥二二六)、男女の途に悩み続けるのが自分の「宿世」なのだ、これは道心を志しながら予定外に俗人として暮らし続ける自分に仏が勘気を起こして、発心させようと目論んだ方便なのかとまで考える。この思考回路は、晩年の御法巻や幻巻の光源氏のそれに近似的。しかし、光源氏と薫の決定的な違いは、先に述べた「絆」との関係であらう。光源氏が「絆」を多く抱えることで俗世に引き留められる生を謳歌して人々への情愛を絶やさない一方で、薫は「絆」を負うまいとするにもかかわらず発心できずにいる。「絆」を厭う薫は、恋の手紙も立文の形で紛わして周到に人目を憚る人柄であって、それは父柏木の文から出生の秘事を知った不義の子ならではの臆病さなのだが、こうした薫の他者への情愛に身を投じられない生の形は、その傍らでいささか衝動的な享楽に興じるかに見える匂宮の方が、多情ながら多感だという形で補充される格好なのである。

手習巻で、横川僧都は行き倒れていた浮舟を助ける。「まことの人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る棄てんこといみじきことなり。……鬼にも神にも神に領ぜられ、人に追

はれ、人にはかりごたれても、これ横さまの死をすべきもののにこそはあめれ、仏のかならず救ひたまふべき際なり。なほこころみに、しばし湯を飲ませなどして助けこころみむ」(⑥二八四・五)と、横川僧都は自らが仏罰を受けるのも厭わず、弟子たちが穢れに触れると批判的に見るにもかかわらず、死にかけている浮舟を助けようとする。こうした僧都の他者への関わり方は、かつて娘への情を捨てきれなかった出家後の朱雀院、臨終の八宮の帰郷を制止した阿闍梨のいづれとも、似て非なるものがある。さらに、「俗聖」ながら、否なればこそ娘の浮舟に無慈悲だった八宮や、道心を抱えながら、否なればこそ「形代」としてしか浮舟を見なかつた薫とも異なり、一筋の救済への光を与える存在となっていく。

さて横川僧都らに助けられ、正気を取り戻した浮舟は、とても生きかねると出家を願うが、「いとほしげなる御さまを、いかでか、さはなしたてまつらむ」(⑥二九八)と横川僧都は五戒を授けるだけで帰山した。しかしその後、横川僧都の妹に庇護されて小野で暮らす浮舟は、尼君の娘婿の求愛を受けて窮地に陥り、明石中宮の病平癒のために都に上る横川僧都に、再び出家を切望する。生きることを捨てた身を助けられた恩情に感謝を述べつつも、「なほ世づか

ずのみ、つひにえとまるまじく、思ひたまへらるるを、尼になさせたまひてよ。世の中にはべるとも、例の人にて、ながらふべくもはべらぬ身になむ」(⑥三三五)、やはりこの世には居場所がなく出家したいと切願する。僧都は、「まだいとい行く先遠げなる御ほどに、いかでか、ひたみちにしかは思したたむ。かへりて罪あることなり。思ひたちて、心を起こしたまふほどは強く思せど、年月経れば、女の御身といふもの、いいたいだいしきものになん」と、若い身空で生半可な覚悟で出家をした挙句に出家者として意思を貫けなければ、かえって罪深くなると引きとどめるべく説得する。しかし浮舟は、「幼くはべりしほどより、ものをのみ思ふべきありさまにて、親なども、尼になしてや見ましなどなむ思ひのたまひし。まして、すこしもの思ひ知りはべりてのちは、例の人ざまならで、後の世をだに、と思ふ心深くはべりしを、亡くなるべきほどのやうやう近くなりはべるにや、心地のいと弱くのみなりはべるを、なほいかで」(⑥三三五―六)と、幼少から物思いを負う身の上で、親も自分を尼にしようかと考えたし、まして物心ついてからは常人とは異なる身で、せめて後生だけでもと願ってきた、死期が近いのか気弱になったのでぜひに、と重ねて出家を懇願する。僧都はこんな美貌でなぜ身を厭わしく思う

のかと訝しみながらも、「さるやうこそあらめ、今までも生きたるべき人かは、あしきものの見つけそめたるに、いと恐ろしく危きことなり」と、しかるべく宿世があるのだらう、奇怪な物に憑かれたこともあつて命も危ういと、ついに出家させた。「流転三界中」(⑥三三九)と唱えて髪を削ぎ、後悔しないように説く僧都に、浮舟は「うれしくもしつるかなと、これのみぞ生けるしるしありておぼえたまひける」(⑥三三九―四〇)と念願がなつたと喜んだ。

ここで目を引くのは、浮舟の出家を志す思念の形が、幼少からの自身の生を振り返る述懐となっており、晩年の藤壺、柏木、紫上、光源氏らが人生の栄華や憂愁を回顧した系譜上にある点である。また浮舟が幼少の頃から出家を宿命づけられていたと語るところなど、幼少の頃から出生に瑕を感じて出家を志した薫と、どこか相似的である。その薫の道心が次第に怪しくなっていくのと相反して、浮舟はついに出家を果たす。

しかし横川僧都は、浮舟の懇願を受け入れて出家させたのち、薫から浮舟との関係を知らされ、夢浮橋巻、浮舟に便りを出す。「御心ざし深かりける御仲を背きたまひて、あやしき山がつの中に出家したまへること、かへりては、仏の責そふべきことなるをなん、うけたまはり驚きはべる。

いかがはせん。もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなん」(⑥三八七)、この僧都の手紙は還俗を勧めたと見るのが優勢だが、あくまで出家者として生きることを勧めたと見る説も根強い^⑬。文脈上は還俗勧奨が自然であろうが、源信を思わせる高德の僧にふさわしい態度かが疑われるからであろう。横川僧都が浮舟の命を救い、当初は出家を制するものの、自らの手で出家させ、なおかつさらに事情を知って還俗を勧めたのだとすれば、その経緯は変節的にも見えかねない。この僧都の姿勢には浮舟に寄り添う慈悲深さを読みたいところだが、権門の薫への慮りという側面も捨てきれまい。

光源氏の物語では、朧月夜や女三宮がその役どころを担うことから明瞭なように、たやすく実現される出家は光源氏の側から浅はかなものと評され、容易に出家を果たせない光源氏にこそ物語の主人公としての卓越性が保証されていた。「絆」にとらわれる光源氏に人間らしい情感の豊かさが見出され、それが物語を支えてきたと言つてもよい。しかし次世代の物語で出家の課題の担う薫は、当初期待された清廉な印象は次第に世俗にまみれて薄まり、「絆」を負う覚悟がないままに上流貴族の栄華の日常に埋没する。ち

ようど矮小化された空蟬の出家を通して藤壺の出家の本質を炙り出すように、妹尼の娘婿の中将による浮舟への求愛は、薫の道心と恋の本質を残酷なまでに暴き出す。累積され層をなすように積み重なる類話は、すでにある物語に対して一種の注釈的機能を果たすからである^⑭。

そして管絃も嗜まず教養浅い浮舟は、果断に出家していく。それは一面では賢木巻の藤壺や関屋巻の空蟬のように男の求愛を拒む出家であり、朧月夜や女三宮も含めて密通した女たちの出家の系譜上にあつて、光源氏の物語の論理から見れば、「あさへたること」^⑮、浅はかな出家の決断に相違ない。だが源氏物語はその最後で、これまで書き残した出家する側の女の論理に焦点を合わせ、浮舟の出家の側に寄り添う語り口となっていく。それはいわば光源氏の物語の反転する世界であり、この物語が長編化する中で最後に辿り着いた、女の自立への希求なのだろう。

【注】

- (1) 岡崎義恵「光源氏の道心」(初出一九三四年、『岡崎義恵著作集5 源氏物語の美』宝文館、一九六〇年)、阿部秋生『光源氏論 発心と出家』(東京大学出版会、一九八九年)、篠原昭二「臨終行儀と『源氏物語』——逝く者と見取る者と

——「〔国語と国文学〕一九九〇年十一月」、三角洋一『源氏物語と天台浄土教』（若草書房、一九九六年）、「宇治十帖と仏教」（若草書房、二〇一一年）、中哲裕『源氏物語の主題と仏教』（新典社、二〇二二年）、柳井滋『源氏物語の仏教思想』（『源氏物語研究集成 第六巻 源氏物語の思想』風間書房、二〇〇一年）など

- (2) 高木和子「光源氏の出家願望——『源氏物語』の力学として——」（初出一九九九年十二月、『源氏物語の思考』風間書房、二〇〇二年）、「第二部における出家と宿世——仏教的価値観による照射」（初出二〇〇七年、『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』岩波書店、二〇一七年）、「源氏物語の『数まふ』「後見」「絆」考」（『国文論叢（神戸大学）』二〇二二年十一月）、「源氏物語における〈無常〉について」（『中古文学』二〇二二年十一月）
- (3) 罪の問題については、今西祐一郎「罪意識のかたち」（初出一九七三年五月、『源氏物語覚書』岩波書店、一九九八年）、増田繁夫「光源氏の古代性と近代性——内面性の深化の物語——」（『源氏物語研究集成 第一巻 源氏物語の主題上』風間書房、一九九八年）、井内健太『源氏物語』における冷泉帝の罪について」（『東京大学国文学論集』二〇一七年三月）、「源氏物語」須磨・明石巻の天変」（『国語と国文学』

二〇一八年二月）など

- (4) 秋山虔「好色人と生活者——光源氏の「癖」」（初出一九七二年十二月、『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四年）、高木和子「光源氏の「癖」」（『源氏物語の思考』注2）
- (5) 伊藤博『源氏物語の原点』（明治書院、一九八〇年）
- (6) 鈴木日出男「光源氏の道心と愛執」（『源氏物語と源氏以前研究と資料——古代文学論叢十三輯』（武蔵野書院、一九九四年））、柳井滋『源氏物語における「出家」』（『国語と国文学』一九九八年十一月）、高木注2「第二部における出家と宿世」など
- (7) 高木和子「源氏物語のからくり——反復と週上による長編化の力学」（『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』注2）
- (8) 中哲裕「八宮——準拠としての花山院・二十五三昧会——」（『源氏物語講座2 物語を織りなす人々』勉誠社、一九九一年）、原岡文子「宇治の阿闍梨と八の宮——道心の糸——」（『源氏物語 両義の糸——人物・表現をめぐって——』有精堂、一九九一年）、小林正明「浮舟の出家——手習巻——」（『源氏物語講座4 京と宇治の物語 物語作家の世界』勉誠社、一九九二年）など
- (9) 今西祐一郎「薫の道心と大君——橘姫・椎本巻——」（『源氏物語講座4 京と宇治の物語 物語作家の世界』注8）

は光源氏の出家願望は薫のそれと異なり、「道心」とは呼ばれていないことを指摘する。

- (10) 鈴木日出男「薫論おはえがき」(森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年)、「宇治の物語の主題」(『源氏物語研究集成 第二巻 源氏物語の主題下』風間書房、一九九九年)

- (11) 原岡文子「あはれ」の世界の相対化と浮舟の物語」(『源氏物語 両義の糸』(注8))

- (12) 藤原克己「源氏物語と浄土教——宇治の八宮の死と臨終行儀をめぐって——」(『国語と国文学』一九九九年九月)に詳しい。

- (13) 武田宗俊「源氏物語の最初の形態」(初出一九五〇年六・七月、『源氏物語の研究』岩波書店、一九五四年)

- (14) 高橋亨「可能態の物語の構造——六条院物語の反世界」(初出一九七三年十二月、『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年)

- (15) 高木和子「手紙から読む源氏物語」(初出二〇〇四年、『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』青簡舎、二〇〇八年)

- (16) 非勧奨説には、今西祐一郎「横川僧都」小論」(『論集日本文学・日本語』第二巻、角川書店、一九七七年、三角洋一「横川の僧都小論——浮舟還俗非勧奨論の復権に向けて——」(『源氏物語作中人物論集』注10)、なお勧奨説の今井久代「横川の僧都の人間像をめぐって——「さりとて雲、霞をやは」を生きる者——」(『国語と国文学』二〇〇二年五月)も参照されたい。

- (17) 「類話の累積に見る源氏物語の成立と方法」(『日本文学研究ジャーナル』一七、二〇二二年三月)

- (18) 男から離れる女、という出家の類型については、山本利達「出家への心情」(初出一九七四年一月、『源氏物語攷』塙書房、一九九五年)

- (19) 源氏物語では、密通した女は出家する場合が多いことは、藤井貞和『物語の結婚』(創樹社、一九八五年)が指摘する。